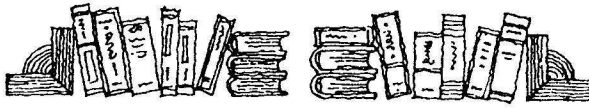


国語国文学会だより



No. 16

1996. 11

日本文学科卒業生の会

国語国文学会

秋季大会・公開講演会のご案内

平成八年度の秋季大会・公開講演会を、左記のように開催致します。

ご多忙のこととは存じますが、お誘い合わせのうえご出席くださいますよう、ご案内申し上げます。なお、会員以外の方々のご来場も歓迎いたします。

日時・平成八年十一月三十日（土）

場所・（午前）（午後）香雪館四階 四〇一号教室

【午前の部】＊研究発表会

香雪館四〇一号教室

（午前十時～十二時十分）

＊発表

・「坂口安吾の芸術家像」

本学院 博士課程後期一年 鬼頭 七美氏

・「日本女子大学蔵宝永版万葉集 書人の報告」

本学日本文学科非常勤助手 八木 京子氏

・「人間性の深まりへ」

――短歌の授業を通しての試み――

本学院六回 浜田美枝子氏

【午後の部】＊総会・公開講演会

（午後一時十五分～四時三十分）

＊開会の辞

（学生委員）

＊活動報告・連絡事項（学生委員・卒業生委員）

＊学科主任挨拶 源 五郎先生

＊公開講演会

・「向田邦子の文体」

本学教授 佐久間まゆみ氏

・「母をおくった後で」

随筆家 青木 玉氏

（祖父幸田露伴、母幸田文、『小石川の家』のこと等）

＊閉会の辞（学生委員）

懇親会のご案内

秋季大会終了後、生協食堂に場所を移して、先生方、在学生をまじえての楽しい交流のひとつと

き、懇親会を開催いたします。

会員の皆様、多数のご出席を心からお待ち致

しております。

なお、同封の葉書にて出欠をお知らせ下さい。

時 ・午後四時四十五分～六時十五分

場所・生協食堂（ウィミン）

会費・卒業生 三千円

在学生 千五百円

（当日、大会受付にていただきます。）

＊出欠席葉書〆切り十一月二十三日（土）！！

青木 玉氏のご紹介

幸田露伴を祖父に、幸田文を母に育った青木玉氏は、平成二年十月、母文をおくられた。その後、「主婦であった」青木氏は、祖父、母とともに暮らした十年間の思い出を描いた『小石川の家』を上梓、芸術奨励文部大臣賞を受賞される。まさに文筆の家の血をひく人らしい、衝撃のデビューを飾った。

それは幸田露伴をおくった後、『終焉』『葬送の記』を書いて母文が文壇に登場したときを思い出させ、因縁を感じさせる。

今回、青木氏は考えられた未、「母をおくった後で」と講演のタイトルをお決めになった。そこには、「成り行きでものを書くようになったただだから」という氏のはにかみと、露伴の孫、文の娘——といわれることへの想いと相反する喜びもこめられてのタイトルであったかと推察される。

ご講演の内容も、学生さんや会員の皆さんからの質問に答えるという形をとりたいとのご希望から、いくつかの質問をお届けしたが、どんなお話が伺えるか。明治の文豪露伴に「小さかった頃の叱られた記憶」など、貴重なお話が伺えることと思う。

(総務・齊藤)

幸田露伴

慶応三年江戸の下谷に生まれる。家は代々江戸城の表坊主衆を勤め、有職故実や遊芸に詳しく、露伴もその薫陶を受けて育った。明治二十二年『風流伝』によって文名を得る。尾崎紅葉と紅露時代と双称される。無骨な大工の執念と意地を描いた『五重塔』など著書、評釈など多数。昭和十二年文化勲章受章、二十二年没する。

幸田 文

明治三十七年、向島に生まれる。露伴の次女。二十四歳で酒屋に嫁ぎ、十年後に離婚。露伴のもとで身辺の世話をする。露伴の死後、随筆、小説を書き、『流れる』で新潮社文学賞・芸術院賞、『黒い裾』で読売文学賞、『闘』で女流文学賞受賞。平成二年没する。

青木 玉

昭和四年、幸田文の長女として東京に生まれる。二十四年東京女子大学を卒業。昭和三十四年結婚。平成六年『小石川の家』で芸術奨励文部大臣賞受賞。『幸田文 筆筒のひきだし』など。朝日新聞日曜版に「なんでもない話」連載中。

国語国文学会・卒業生の会の活動より

*文学散歩 歩いて田端—

十月二十六日(土)、第三回文学散歩(企画係)を新妻さんのご指導のもと、楽しみました。田端文士村記念館で田端文士村のガイド、芥川龍之介、板谷波山の紹介ビデオを視聴したあと、館内を展観。(同館はJR田端駅北口を出て左手前方。午前十時から午後五時まで、入館料無料。月曜日休館、おついで折りにご一見を。)

芥川龍之介の旧宅跡を訪ね、芥川が植え、戦災で焼失後芽吹いたというさざんかを見、芥川が書いている坂の多い町並みの一端を、味わいました。芥川を知るお年を召した方と偶然出会い、往時のことなどを思いがけず同う機会を得、愉快でした。

大龍寺で正岡子規、板谷波山のお墓に花を供え、昼食後、旧古河庭園へ。庭園は秋咲きのばらの香りに包まれており、ジョサイア・コンドル設計の館内は、洋風と和風の組合せの妙、豪華で細心な細工の天井、壁、窓枠など、大正建築の粹に圧倒されました。館内の見学は申込み制ということで、企画係の新妻さん、平山さんのご手配のお蔭でした。参加者は十五名。

次号に詳しく報告いたします。



平成七年 秋季大会

研究発表会・公開講演会 報告

平成七年十一月二十五日(土)、国語国

文学会秋季大会は午前の研究発表を泉山館第三会議室、午後の議事・公開講演会を香雪館四〇一号教室で開きました。

研究発表は発表時間を十分延ばし、質疑も充分受けられるよう考慮し、熱心な応答があつて充実した会となりました。また、研究発表は大学院生がすべての進行を担当して行いました。

午後、議事のあと公開講演会に移りました。後藤祥子先生の「光源氏の原像」は、多くの資料を見事に構築されての講演で、源氏へのあこがれをかきたてられるようでした。

酒井洋子氏は、第一線のミュージカル翻訳者らしい勢いのある話しぶりで、豊かな事例を声色をまじえてポンポン話され、会場は笑いに包まれました。でも、「女子大が大好きだから」という結びは、若い学生さんに印象強いものがあったのではないのでしょうか。

生協食堂での懇親会には、酒井氏も参加され、先生方、学生、卒業生と一緒に乾杯、会食と、和やかな一時を過ごしました。(総務)

研究発表要旨

*当日発表の順に、要旨を掲載させていただきます。

道成寺の変容

新制十五回生 清水 玲子

道成寺説話の初出から、『賢学草子』に至る内容の変容をみる。はじめに『大日本国法華経験記』から『今昔物語集』までを、内容を検討する。特に女が蛇になる時に注目し、「死」を介在させるか否か、また蛇の大きさ、鐘を焼くという異常さについても論じる。

ついで『元亨釈書』から『賢学(日高川)草子』に至る変化を、順を追って跡づける。登場する男女が名を獲得し、複雑な因縁話が付け加わること、能動的な女主人公が、男性側の論理で被害者になってゆき、理不尽に捨てられた恨みを晴らしていく筋へと転回していく。また、文字から絵巻へという形式の違いから要請されたのである川渡りの要素が、後の時代にはずつと語り継がれていく。

初出話では、大きなテーマであった法華経の功德話は後退を重ね、ついには蛇身の浄土への転生の要素は、皆無となっていく。

こうした一説話の初出からの変容を具体的にたどってみる。

紙面の中の『三四郎』

——語るごとく読むことのあいだ——

本学博士課程後期一年次 小長井晃子

『三四郎』はその人気で新聞の購買力を高める意図で、東京朝日新聞、大阪朝日新聞に掲載された。紙面に掲載される、その発表の場を生かした事件性をおびた話題が、ストーリーの細部に内在化されている。情報が横行する「風俗小説」の域を脱し得たのは、実際に起きた出来事をいち早く小説に取り入れ昇華する漱石の方法のうまさと、小説内の時間を連載日に先行させることにより、その双方から読者に意識の連続を促したからではないだろうか。「新聞小説」というメディアの場において、読者行為の継続は、紙面のなかの『三四郎』へ読者を積極的に参加させることであった。

三人称語りと三四郎の言説の相互作用の問題を考察する作業の一環として、紙面の中の『三四郎』がどのような読者の介入を容認する可能性があったのかを、紙面による読者体験をもとに探ってみたい。

大伴旅人の今日性

新十九回・院十回 岩野 圭子

万葉集第三期を代表する大伴旅人には、中国文学の影響が著しくかつ創作意識の濃い作品群がある。梧桐日本琴歌（巻五）、観梅の宴の序（巻五）、そして松浦河の作品（巻五）がそうである。短期間に、こうした一連の文芸作品を創り出した旅人の内なる原動力とは一体何だったのだろうか。

『詩品』や『古今集』の序には、「幽居靡悶 莫尚於詩矣」「心をも慰むるは歌なり」と文学の効用が説かれる。当時の彼の不如意な背景を考えた時、そうした文学意識、あるいは広く芸術のもつ意味・価値に目を向けて考察し直されねばならないであろう。

大江健三郎氏が『新しい文学のために』の中で、『古今集』序に触れつつ文学とは何かを述べているが、万葉歌人・旅人のみならず現代作家においても文学の意味の新たな問いかけが今こそ、必要とされているようだ。

旅人の創作動機を介して、現在にも通じる文学の意味を探ってみたい。

講演

*午後行われた公開講演会の要旨を、発表の順に掲載させていただきます。

光源氏の原像

本学教授 後藤 祥子

大正十一年和辻哲郎氏は、光源氏という考え方を、また成立論においては「帚木」の発端の違和感について疑問を提起しました。「帚木」ではそれまでの純情な源氏がどこかにいってしまっている。「桐壺」と「帚木」の間に我々の見ることのできない作品があって、読者がそこまでのことを理解していることを前提にしているように、思わせぶりの書き方をしている、そうしたことから、書かれた順序、またこの間には挟まれた作品があったのではないか。

また「源氏」は嵯峨天皇の時代から、降下した皇子または親王の子息に与えられる姓ですから、「源氏」が書かれた頃までには二百年が経っているの、「源氏」の重ね写真がいくつかの伝説的な姿として結晶していたのではないかと、しておられます。中世の注釈書である『河海抄』には、すでに昔源氏物語が沢山あって、その中の一つが紫式部の書いた『源氏物語』

であったとしています。

もう一つの考え方が民俗学的なもので、本になった源氏物語が沢山あったのだろうし、読まれ、書かれていたとしています。今日はそこまではいいないので、本としては読まれていない、本にはならないけれど語られたものがどの程度のものかをお話したいと思います。もう一つ、「帚木」の巻には、私たちが読んでいない前の部分に関してほめかしをしている部分があります。その語りを問題として捉え、考えてみたいと思います。

『源氏物語』では、作者が作者の前にいる女房の姿を借りてそれに語らせています。私は知らないけれど、理解してあげなくてはならないと思わせる、巧妙な手口を使っています。知らないけれど説明がなくても、読みつづけていると人間関係などがわかってくる世界です。

二百年の歴史を持つ王朝の物語が、どのように積み上げられているかを考えながら、光源氏の下敷きにされている当時の源氏像について、そのモデルを探ってみたいと思います。

光源氏のモデルたち

近いものとして、源高明という大臣が『河海抄』で取り上げられています。安和二年に太宰権帥に左遷されていることや、息子を大学に入れていることを意識して書かれているように思われるのが、「少女」の夕霧の大学入門の部分です。また、高明が左遷されるのを相人に予言されていますが、これは「桐壺」に似た様子が描

かれています。高明が当時の人達にとって、『源氏物語』と縁がある人と思われている背景には、高明には『西宮左大臣集』という歌集があり、勅撰集に歌が採られはじめたのは、亡くなってずっと後の『後拾遺集』からで、これは『源氏物語』が高名になってからであり、あたかも源氏の運命と重ね合わせようとしていたのではないかと考えられます。

しかし、高明だけが源氏そのものではないと考えられます。それをあかすのが、菅原道真の存在です。道真は十世紀のはじめに太宰府に流され、恨みつつ死んでいます。人々の心の中で怨霊として生き続ける十世紀の終りに、『源氏物語』は書かれています。道真の霊が醍醐天皇を悩ましたように、源氏の前に現れた亡霊は、都の朱雀帝の夢枕に立って、帝は目が見えなくなり、帝は源氏を都に呼び戻そうとします。

『源氏物語』の創作法で考えさせられるのが、一度朝廷から流された人が都に戻り、政権をとった例は一度もないのに、物語の中でそれを可能にしている点です。亡き道真は醍醐帝を脅かしたが、生きている朱雀帝を脅かせば、まだ生きている源氏が都に帰ってこられるのではないかと——死んだ時ではなく、生きている時ならこういう可能性があったのではないかと、昔あったあることを利用していく手法で、準拠です。準拠とは、誰かをモデルにその生涯をなぞって小説を書くのではなく、何かを描きたいために、このようなことも世の中にあったのだということを裏付けるために、用意しておくものとい

いったらよいでしょうか。

時代の遠いのが聖徳太子です。「若紫」には名前も出てきますし、太子の数珠を源氏が受け継いでいます。『聖徳太子伝歴』の中の百済の人との話は、「藤壺」に似た場面があります。また、『聖徳太子伝歴』の作者は藤原業輔とされませんが、紫式部の曾祖父にあたり、この本の内容が相当身近にあって、いつのまにか発想の基になったのではないかと考えられます。

また、王位を喪失した人々の負の意識が、「即位すべくして即位せずに畢った王」への思いが『源氏物語』のエネルギーになっているとも考えられます。陽成天皇の元良親王、村上天皇の為平親王とその子頼定など、父親の代から王位にふさわしい人が、何らかの妨げにあって王位につけなかった部分を、他のことで補おうとしています。

宇多天皇の皇子齊世親王は、道真の女婿ですが、その子源英明に関しては『源氏小集』という漢詩文集があります。『扶桑集』に橘在列と英明の唱和詩がありますが、「仁人は不遇であり、王の傍には小人が居る」と世を捉えています。仮名文では言えないことも、漢詩の世界ではこうして表現しています。

源氏の中には、先祖をたどると自分が王であったかも知れない人材と結びついていきます。本来あるべき場所に自分が居ないということを本人も感じ、周囲もまた認めています。これらが、『源氏物語』の原点ではないでしょうか。

(文責・編集部)

翻訳の舞台裏

演出家・翻訳家(新14英) 酒井 洋子

今日は舞台劇翻訳の裏側を、それもミュージカルにしぼってお話してみたいと思います。『シカゴ』『ジョージの恋人』『王子と踊り子』、最近では『レ・ミゼラブル』『回転木馬』『シー・ラヴズ・ミー』と大きなミュージカルの翻訳をしております。どうしてこうした仕事を続けるようになったかを、まずお話しましょう。

英文科を出て、ハワイ大学イースト・ウエスト・センター大学院演劇科へ進学しましたが、犬養道子さんの推薦でした。学生時代、私はESSの部長でディベートの大会に五人一組で出場、東京都第一位(青山学院大と同位)、全国三位の成績をあげ、シェイクスピア劇ではシャイロックを演じ、学内ではちょっと目立つ存在だったものですから、犬養さんが取材に見えた時、何人かの学生の中に選ばれて取材を受けました。寮監が大勢同席した会で、皆思うことを言わないのです。私は思う通り、女子大は古いところがある、しかし、その裏には良さもあって……とのびやかに発言したら、それが気に入られてその縁で推薦を頂いたわけです。好きな演劇の勉強をして帰国し、「マールイ」に所属して『オリバー』の演出助手をしたりし

ていた時、東宝の菊田一夫さんがブロードウェイのスタッフを招いて『スカーレット』をやることになり、私は通訳兼演出助手で参加することになりました。それは大変な作業で、稽古場もあちらこちらを借り歩き、菊田天皇とブロードウェイのやり方はぶつかることばかり。私は通訳だからあちらの言い分を通訳して伝えなければいけない。間に入って、気の休まるひまもない毎日で、とうとう声も出なくなる有様でした。当時の仲間は戦友というか、固い結束感で結ばれていて、その時の演出助手が偉くなり、今も私を使ってくれているわけです。でも、その直後は東宝では使ってもらえなくなり、「マールイ」でニール・サイモンを訳したり演出しているうちに、紀伊国屋演劇賞を受賞、また東宝が呼んでくれるようになりました。

翻訳のポイント

ニール・サイモンをどんどん訳している時、翻訳に詳しい方が、私の訳す日本語版は原文と同じ長さだと感心してくれて、その言葉がそれ以後の私の指針になりました。もともと私はある思想が言葉となって伝播されるのに、アメリカ人であろうと日本人であろうと、根本は同じだと思っており、それを踏まえていれば、長さは同じになるはずだと思っていました。日本語に訳したものは英語より長い——というのが当時の常識でしたが、今では変わってきていま

す。『レ・ミゼラブル』の仕事は時間的に厳しいものでした。一週間から十日で訳してほしいというのです。ジャンバルジャンはわかるけど、あとの登場人物の名前もディテールも全部わかるはずがない。原作を斜めに読みながら徹夜同然にして訳しました。もっと驚いたのは、私の訳をBBCの日本語部の人チェックしているというのです。返ってきた台本は98点。まあ良かった、と思いました。マイナスの2点は「クイア」を前後関係がよくわからなかったので、無難に「変な人」としたのが実は「ホモ」。あとの1点は少年の台詞を大人の男性の言葉づかいにしたための減点で、翻訳にはこうしたむずかしさがあります。

ミュージカルの場合、翻訳者と訳詞者の協力も大事です。囚人たちが看守の見張る中で歌う場面、「Look down, Look down……」を私は「下見ろ、下見ろ」と訳したのですが訳詞の岩谷時子さんは「下向け、下向け」としてくださった。続く歌詞が「顔をあげるな、死ぬまでここ（に）いるのさ」というのですから、「見ろ」がいいか、「向け」がいいか、おわかりですね。岩谷さんは日本人が歌いやすいように、無理な上げ下げをする訳をなさらない。「おしゅれするんだ」という言葉を、「おしゅれす／るんだ」では、わからない。日本語の語感を楽譜に合わせて訳されます。私の訳のままの歌より、訳詞者がつけた訳で、役者さんが舞台で歌った

時、より感動的な歌詞になっています。『回轆木馬』の「You never walk alone」「あなたはひとりでは決して歩かない」——では小学生ですね。がんばっていれば、皆あなたのそばにいる、そんな意味で、私は「ひとりじゃないよ、ひとりじゃない」と訳したのですが、俳句のように削って削って省略していく——それも日本人の情感の中では大切なことだと思っています。

同じ『回轆木馬』で、市村正親さん演ずるやぐざ者がキャリーを口説き、キャリーが走って逃げていく場面があります。英語では特に言葉はなかったのですが、逃げるキャリーを止める言葉がほしい、「だがよ」と入れたら市村さんがそれをまた歌舞伎調で演じてくれて、評判になりました。『シー・ラヴズ・ミー』では「Dear Friend」がこのミュージカルのキーワードですが、常識的な「拝啓」ではなく「手紙のあなた」と訳したのは成功だったと思っています。

言葉は皆のもの。言葉を大切にしていきたいと思えます。皆さんも美しい、よい言葉を話してください。夫が舌ガンで言葉を失った時、人格が失われたと私は思いました。言葉はその人の人格を表す最たるものです。

言葉を追いかけて、探し、探し、よりの確な、より楽しい世界を作っていくよう、今まで以上によい訳をお耳に届けたいと思います。

(文責・編集部)

佐久間まゆみ氏のご紹介

佐久間まゆみ氏は、平成二年度に筑波大学から本学に移籍されて以来、文学部日本文学科と大学院文学研究科の日本語学、および、日本語教育講座の科目をご担当されています。

ご専門は国語学の文章論で、大学・大学院時代に時枝誠記門下の永野賢・市川孝尚先生に師事され、日本語の文章・談話の構造分析をお進めになっています。特に、文章の成分として、改行一字下げの「段落」ではなく、内容上のまとまりとして他と相対的に区分される「段」という言語単位を新たに設定し、その統括機能と重層構造を説明するという独自のテーマに取り組んでおられる文章研究の第一人者です。

また、日本人と外国人を対象とした段落意識や要約文に関する調査や実験を実施して、その成果を日本語教育の実践の場に生かすべく、意欲的な試みを展開されています。前任校での仕事を通して、氏の敬愛してやまない故寺村秀夫先生から、日本語の理論的研究と教育的実践を一体化することの大切さを学ばれたようです。

高校・大学時代と演劇部で活躍され、ドラマツルギーへの興味から、文章・談話研究を志すようになったとのことですが、今回の講演では、ドラマ作家でもあった向田邦子の文体にどのような鋭い切り込みで迫っていただけなのか、大変興味深いところです。

(文学部日本文学科講師 田辺和子)

経歴

一九七〇年 東京学芸大学教育学部B類国語科卒

一九七三年 お茶の水女子大学大学院人文科学研究所修士課程修了

以降 東京外国語大学外国語学部付属日本語学校専任講師、米国カルフォルニア大学バークレー校客員研究員、米国ミドルベリー大学夏期日本語学校招聘講師を経て
一九八二年 お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士課程単位取得退学
以降 筑波大学専任講師・助教授を経て現在に至る。

主な著書

女性と文化―社会・歴史・母性―(共著 白馬出版)

日本表現文型中級Ⅰ・Ⅱ(共著 イセブ出版)

○文章論と国語教育(共著 朝倉書店)

○文章構造と要約文の諸相(編著 くろしお出版)

○ケーススタディ 日本語の文章・談話(共編著 桜楓社)

○表現指導の原理と方法Ⅱ(表現学体系30分担執筆 教育出版センター)

○要約文の表現類型(編著 ひつじ書房)
向田邦子(表現学体系28 分担執筆 教育出版センター)

*若い会員の入会がつづいています!!

若い回生の皆さんに、入会の呼び掛けをしていることはお伝えした通りですが、そうした努力が実ってか、最近、若い回生の方が入会してくださり、心強いかがりです。

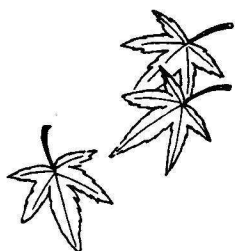
新四十三回生(平成五年卒)二十名、四十四回生八名、四十五回生十二名、今年卒業の四十六回生三名です。

嬉しいことの反面、八月にお送りした『国語国文学会だより』は、二十二通が「転居先不明」で返送されてきました。住所変更の方は若い回生に多く、住所の確認に努力はしておりますが、手不足もあってなかなか把握できません。

住所変更の際は、是非、ご連絡ください。同窓会である桜楓会へのご連絡でもけっこうです。私どもも桜楓会に問い合わせでは確認作業をしておりますので、ご協力をお願い申し上げます。

*秋の大会で図書の頒布をします

十一月三十日の秋の大会では、講演者青木玉氏の著書『小石川の家』、既報の『桜楓の百人』(国文科卒山崎れいみ、星瑠璃子、志賀こう子の各氏他執筆)などを頒布の予定です。ご購入ご希望の方はその折りにお求めください。



国文目白

熊坂敦子教授退任記念号目次

熊坂敦子教授略歴ならびに著述目録

小泉八雲と秋成

浅野 三平

『女学雑誌』にみる〈恋愛〉観の一面

小長井晃子

—— 蔵本善治と青柳有美を中心に ——

村田 由美

『草枕』論

志保田那美について

『明暗』論

お延の役割

「ろおれんぞ」という女性

稲田智恵子

「奉教人の死」の〈宗教〉性

松本 直子

「ジェンダー」の呪縛を描いた物語

武下 智子

「夫婦」論

中島敦の手法をめぐって

「ひもじい月日」論

「巫女的なもの」への軌跡を中心に

「女坂」試験

〈女の言葉〉の発露

「二世の縁 拾遺」試験

〈性〉の発見・〈生〉の獲得

「耳環路」

—— セクシュアリティの行方 ——

「なまみこ物語」

—— 自己表現としての憑霊 ——

「朱を奪つもの」三部作試験

—— 滋子の宗教観をめぐって ——

吉田健一における成熟志向

高橋 智子

平惟仲について

高橋 由記

—— 定子の中宮大夫辞任に関連して ——

源氏物語の「思春期」

田邊 玲子

昌徳宮所蔵『源氏物語 扇屏風』の場面について

盧 亨美・稲員直子

—— 『日本絵画調査報告書』をもとに ——

伝承文学における山姥

山岡めぐみ

西鶴『甚忍記』考

山本いづみ

論説文の文末述部における「段」の統括機能

伊藤 誓子

テレビの相談番組の談話構造

能田 陽子

韓国の語り物研究

崔 文正

上村悦子著『蜻蛉日記解釈大成全九巻』

石原 昭平

後藤祥子著『元輔集注釈』

高野 晴代

下玉利百合子著『枕草子周辺論』

後藤 祥子

小松登美著『和泉式部研究』

後藤 祥子

木谷喜美枝著『尾崎紅葉の研究』

大屋 幸世

熊坂敦子著『夏目漱石の世界』

源 五郎

【書評】

※申し込み 千112 東京都文京区目白台二一八一

（葉書にて） 日本女子大学日本文学科研究室

※冊子代金は、冊子到着後に払い込んでください。

送料別一冊二千円です。

「国文目白」係宛

振替番号：〇〇一九〇一八一九七〇七

日本女子大学国語国文学会卒業生の会

一九九六年十一月十五日

発行・日本女子大学日本文学科

国語国文学会卒業生の会

国語国文学会卒業生の会

国語国文学会卒業生の会

国語国文学会卒業生の会

国語国文学会卒業生の会

国語国文学会卒業生の会

国語国文学会卒業生の会

国語国文学会卒業生の会

国語国文学会卒業生の会

国語国文学会卒業生の会

国語国文学会卒業生の会

国語国文学会卒業生の会

国語国文学会卒業生の会

国語国文学会卒業生の会

国語国文学会卒業生の会

国語国文学会卒業生の会

国語国文学会卒業生の会

国語国文学会卒業生の会

国語国文学会卒業生の会

国語国文学会卒業生の会

国語国文学会卒業生の会

国語国文学会卒業生の会

国語国文学会卒業生の会

*『国文目白』

熊坂敦子教授退職記念号発行（上段）

ご希望の方は葉書でお申込みを。

千112 東京都文京区目白台二一八一

日本女子大学日本文学科研究室

「国文目白」係宛

（冊子代金は冊子到着後に）

*お詫び

本紙の発行が昨秋につづき、大変遅れました。申し訳ございませんでした。

大会出席はがきは、折り返し、二十三日（土）までにお送り返してください。大会に多くの皆さまがご参加くださいますよう、お待ち申し上げております。

伝言板

本年度の会費千円未納の方は、「国語国文学会だより」（八月発行）に同封致しました払込用紙に、氏名・電話番号・回生を記入の上、郵便局からお振込みください。

振替番号：〇〇一九〇一八一九七〇七

日本女子大学国語国文学会卒業生の会

一九九六年十一月十五日

発行・日本女子大学日本文学科

国語国文学会卒業生の会